



22112037



JAPANESE A2 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A2 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A2 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Wednesday 11 May 2011 (morning)
Mercredi 11 mai 2011 (matin)
Miércoles 11 de mayo de 2011 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A, soit la section B. Écrivez un commentaire comparatif.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.

問題 A か問題 B のどちらかを選び、答えなさい。

問題 A

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。

テキスト 1

宇宙からの観察も、今や人工衛星を使って地上のさまざまな自然環境、人口環境を観測できる時代になった。文化遺跡さえ調べられる。

この点から、「なにも人間が出かけることはない」との議論もできる。が、ロボットの目と人間の目は違う。どの角度でも立体的に瞬間を、しかも目的意識を持ちながら鮮明な像を心に焼きつけるには、
5 宇宙から実際に人間が見るしかない。その印象を伝えることで多くの人々の共感が得られる。ちょうど、登山して本物の景色を目の前で見るか、あるいはテレビで見るかの違いと同じであろう。

ところで、私は科学者として宇宙に実験を行うために行ったので、できるだけ感情を排し、淡々と無機的に仕事をこなすように努めた。顕微鏡で細胞を見ながら地球や宇宙のことを考える余裕はなかった。ところが、疲れてふと見上げた丸い窓に見える地球の表面の様子が、今あたかも見ている、生きて
10 いる細胞のように見えたのだった。

顕微鏡の中はミリメートル以下の大きさ、一方丸い窓から見えるのは数十キロメートル以上もある模様。この時、直観的に物の大きさは相対的なものであり、連続してつながっていることを感じた。同様に、時間的にも我々が夜や昼と認識しているのは、単に球体の地球を太陽が照らしているかどうかにすぎないのだということが、わずか 90 分で地球を一周するスペースシャトルから眺めると、感覚的にわかるのだった。
15

私にとって最も思い出に残る衝撃的な写真は、二十歳の時に見た、アポロ 8 号から撮影した月の地平線上にぽっかり浮かぶ丸い地球の風景である。米国が国威発揚のために行ったアポロ計画。科学技術で人間の足跡を月面にしるした功績は大きい、人類にとって最も大きい業績は、実はあの丸い地球の表面の薄いベールの大気の中のみ、すべての生物が存在しているということを訴えたことではなかった
20 かとと思う。

私が飛行したスペースシャトルからは、一度も地球全体は見ることができなかった。が、その丸い一部が真つ暗闇の宇宙の中で、薄青い大気に覆われて輝いていた。そして、どの宇宙飛行士も声をそろえていう地球の美しさ、神々しさが私にも実感された。

地球の美しさは、まさに生命の輝きそのものを感じられた。

もうりまもる (毛利衛 「人はなぜ宇宙をめざすのか」 よりの抜粋、1995 年 3 月 26 日朝日新聞)

毛利衛 (1948 年～) 1992 年にスペースシャトル・エンデバー号で、科学者宇宙飛行士として活躍。

テキスト 2

- ロケットから送られている地球の映像を
 茶の間のテレビジョンが流している
 地球の弧の上をうっすら覆っている大気圏
 地球をリンゴの大きさとすれば
- 5 大気層の厚さはリンゴの皮ぐらいですなどと。
 繊いブルーのリングが濃紺になって
 宇宙の闇に溶けている
 手袋とマフラーの重装備で
 娘と二人手をつないで外出する
- 10 木枯らしの吹く空を見上げたが
 まずは何ごともない
 近所の眼科で腰かけて順番を待つ
 最近 肉眼でみる活字がたよりなげに見える
 眼鏡はかけないでねと
- 15 足を揺らしながら娘は言うが
 不器用なぼくにコンタクトレンズの使用は無理だろう
 <角膜の上には涙の薄い層があり、レンズは
 涙の上に浮いた状態で安定しています>と
 ポスターにはある
- 20 眼の半球を覆っている薄い涙の膜に
 レンズが浮かんでいる拡大写真
 危なげだなどと眺めていると
 急におかしみがこみあけてきた
 どうしたのと 尋ねられても
- 25 まだ小さなお前には
 わかってもらえそうにない
 存在は<涙の薄い層>につつまれ
 見るとは<涙の薄い層>を通すことだなんて！

いくらこうへい
 (以倉紘平「冬の日」『地球の水辺』1992年)

以倉紘平(1940年～) 詩人。

肉眼・・・眼鏡などを使わない、そのままの視力
 角膜・・・眼球の前面を覆う透明な膜

問題 B

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。

テキスト 3

シンガポールの有名病院、グレンイーグルス・ホスピタル。「目が覚めましたか?」。産婦人科病棟でジェン・ランビキットさんがにこやかに患者に話しかけた。英語のアクセントで、外国人だということがすぐにわかる。ジェンさんはマニラ出身のフィリピン人だ。一月からここで看護師として働いている。

- 5 ジェンさんのような外国人はシンガポールの医療現場に欠かせない存在だ。看護師だけでなく、手術室までベッドを押ししたり食事を出したりする医療助手にも外国人は多い。国籍はフィリピン、インド、中国、インドネシアなどさまざまだ。病院の中には、ぎゅっと凝縮したアジアがつまっている。

保健省の2009年の統計によると、外国人は看護師全体の15%。政府は最近シンガポール人看護師の育成強化にも乗り出したが、高い外国人比率の根っこには看護師不足という日本と同様の、いや世界共通の問題がある。

- 10 看護師として働くにはシンガポールの国家試験に合格しなければならないが、英語教育を受けた看護経験者には高いハードルではないようだ。フィリピンとアラブ首長国連邦アブダビで計10年のキャリアをもつフィリピン人のモニアさんは、一週間ほどの試験勉強で見事合格。すぐに正規の看護師として仕事を始めた。

- 15 「アブダビは住宅や交通費の補助もあり、待遇はよかった。でも故郷に近い新天地で挑戦することにしたの」とモニアさん。彼女のような優秀な人材を呼び込む競争は今後激しくなると予想される。シンガポールは看護師の国家試験をフィリピンで実施するなど、外国人看護師の確保に余念がない。

- もちろん英語が公用語のこの国でも、言葉の問題がないわけではない。「英語の苦手なお年寄りには身ぶり手ぶりで説明するのですが、同僚の助けを借りることもあります」とジェンさん。また、入院中のシンガポール人のリムさん(50代女性)は「聞きなれない外国人の発音には戸惑うわ。だいたい何とかなるけどね」と話す。多人種が暮らす国家ならではのたくましさ、看護を受ける側にも育っている。(中略)

長く勤めて永住権を取得し、家族を呼び寄せる人もいれば、ここで働きながらオーストラリアや英国の看護師試験の勉強をし、海外転職するタフなキャリアアップ型看護師もいる。「日本にも元同僚がいるの。私も行ってみたいな」と、モニアさんは笑った。

(小林めい「ナースは国境を越えて」『アゴラ』2010年6月号)

小林めい：シンガポール在住リポーター。

テキスト 4

今回バンクーバー冬季オリンピックのフィギュアスケートを見て考えたことがありました。ペアを連覇^{れんぱ}しているロシア代表に日本人女性の名前を見つけ、少しうれしくなりました。日本生まれ日本育ちの川口悠子さんがロシア国籍を取得したのはロシア代表の演技を見て感動したのがきっかけだったそうですね。残念ながらメダルを逃してしまいましたが、多くの日本人が彼女に対し、日本代表と変わらないぐら^{かつさい}いの喝采を送っていたのがとても印象的でした。

これまでは個人が国籍を変える際、紛争や食糧事情、政治的な立場や労働市場への参加資格、あるいはアイデンティティーの問題が国境を越える力になってきました。オリンピックもそうした国籍を前提に成り立っていきましたから、参加国のナショナリズムを刺激し、その時どきの政治情勢が大会のあらゆる部分に色濃く反映されてきました。

10 冷戦たけなわの頃だったら、川口さんへの反応はまた違ったものになっていたでしょう。フィギュア女子の米国代表には日本国籍を持った長洲^{ながすみらい}未来さんがいました。同じオリンピックで、日本に生まれた女性が2人も外国の代表に選ばれたことは、国家とスポーツの関係を考える上でもおもしろい現象かもしれません。国籍とはもはや生涯変わらない運命的なものではないと、2人が教えてくれたような気がします。

15 考えてみれば、サッカーの世界では外国人選手の日本国籍取得が日常茶飯事^{さはんじ}に行われています。ラモス^{るい るべす}瑠偉、呂比須^{らひす}ワグナー、三都主^{さんとし}アレサンドロと、昨今の日本代表選手を主力として支えているのはブラジルから日本国籍を取得した選手ばかり。それでも一人ひとりに「日本への愛国心は・・・」「日本とブラジルとの外交関係は・・・」と問いただすような人はいないでしょう。日本生まれで外国の代表としてワールドカップに参加する選手が出ればもっと理解が進むかもしれません。

20 もしかしたら、川口さんや長洲さんにあこがれて海を渡るような子どもたちが次のオリンピックに出てくることだって不思議ではありません。わたしたちは国籍によってのみアイデンティティーが規定されない時代に入っているのでしょうか。各国が多様性を競う姿こそ、ナショナリズムやコマーシャルイズムの次に来るオリンピックのトレンドなのかもしれませんね。

^{カンサンジュン}
(姜尚中 「多様性を競うオリンピックへ」『アエラ』2010年3月15日)

姜尚中 (1950年～) 政治学者。東京大学大学院教授。